卒業生と振り返る

先進校のキャリア教育 成果とこれから

大きな環境変化が予想される社会で、主体的に生き抜くための能力や態度、価値観を養うキャリア教育。その取り組みを生徒はどのように受け止め、自身の成長へとつなげたのか。教師と卒業生が振り返る。

生徒に「なぜ?」を問い掛ける中で さまざまな変容を見いだしながら 未来をどう生きるかを考えさせる

宮城県仙台向山高校

働くことを通じた社会貢献をまず考える

――現在、仙台向山高校は「『つながる』3年間」をコンセプトとしたキャリア教育「向陵プラン」を実施している。1年次では、「社会とつながる」をテーマに、社会の課題への興味・関心を養い、それを解決する手段として働くことを考えさせる。その上で、職業人講話や事業所訪問などを行う。一連の取り組みが目的としているのは、社会貢献につながる使命感の醸成だ。

穂積　1年次の活動は、興味のある社会問題を生徒が書き、内容が似ている者をクラスを超えてグループ化することから始まります。これは君たち2人の在校時から変わりません。事業所訪問では、自分が調べた

宮城県仙台向山高校

見通しを持って進路を選び、主体的に自己実現する力を獲得し、「未来を切り拓く人材＝社会に貢献できる人材」の育成を目指した3年間の進路学習「向陵プラン」を実施。2011年度キャリア教育優良学校として文部科学大臣表彰を受ける。

◎1975（昭和50）年設立。全日制／普通科・理数科／共学。1学年約200人。13年度入試では、国公立大は岩手大、東北大、宮城教育大、山形大などに84人が合格。私立大は東北学院大、東北福祉大、法政大などに延べ240人が合格（現役のみ）

〒982-0832　宮城県仙台市太白区八木山緑町1-1 ／電話 022-262-4130

http://mukaiyama.myswan.ne.jp/

▶▶▶2010年10月号「指導変革の軌跡」で同校の取り組みを紹介しています。

主体的に生き抜く力を育むキャリア教育

社会課題について、社会人がどのように解決策を模索しているかを聞くことを重視しており、中学校までの

宮城県仙台向山高校
穂積 暁
ほづみ・さとる
教職歴17年。同校に赴任して9年目。進路指導部部長。

宮城県仙台向山高校
作間偉也
さくま・ひでや
教職歴16年。同校に赴任して6年目。進路指導部副部長。

宮城県仙台向山高校 卒業生

吉田千里 よしだ・せんり
宮城大事業構想学部4年

鈴木 萌 すずき・もえ
東北大農学部4年

職場訪問とは大きく異なります。

作間 訪問先の選定と依頼も、君たち自身で行いましたよね。2人は順調に承諾が得られたけれど、実は最初の段階ではかなりの生徒が断られるんです。悲しそうな表情で報告に来る生徒に、気持ちを切り替えて再度チャレンジするように促します。改めて訪問の意図を説明すると、「そこまで考えているのなら」と受け入れられることもよくあります。

穂積 私たちとしては、うまくいかない時にどうするかを考えさせたかったんです。失敗した原因を私たちと一緒に考えながらもう一度立ち上がり、次の策を考える力を身に付けさせようと思っていました。

鈴木 訪問を断られるのも大切な経験だと考えられていたなんて、当時は気が付きませんでした。私は、気象台を訪問したのですが、実は現場を見て、自分の想像とのズレを感じたんです。だからこそ、自分がどんな分野で社会に貢献したいかを改めて深く考えることができ、好きだった生物とのかかわりが深い農学への興味に気付けたのだと思います。

吉田 僕は中学校の先生を訪問したのですが、どんな話を聞いて、何を思ったか、実はあまり記憶にないんです。すみません……。

穂積 いや、それでいいんだよ。全員が同じ取り組みで、同じように気付きを得ることはないんだからね。

大学の学問を体感できる場を新たにつくった

――2年次の取り組みは、「学問とつながる」がテーマだ。2人は、興味がある学問調べ、大学のオープンキャンパスへの参加、そして志望理由書の作成を経験した。

穂積 当時も今も、2年次では志望する学問分野ごとに新たなグループをつくっています。1年生で福祉に興味を持ち、福祉ロボットに関連する企業を訪問した生徒が、2年生ではエコエンジンや宇宙開発からこの学問に関心を持った生徒と同じ「機械工学」のグループに入るわけです。メンバーと話す中で、学問から広がる進路の多様さを実感できます。

鈴木 私は東北大の農学部のオープンキャンパスに行きました。事前にグループで農学について調べていたので、大学院生にたくさん質問が出来て、この分野でやっていけそうな気がしました。オープンキャンパスの後は、「東北大農学部に入るためには何をすればよいか」を考え始め、9月から通学電車の中で英文を読むなど、学習習慣が大きく変わったんです。オープンキャンパスで大きな刺激を受けたことが、自分の変化につながったのだと思います。

吉田 僕は、宇都宮大の国際学部のオープンキャンパスに行きました。大学の雰囲気が分かったのはとてもよかったし、国際関係学は何でも出来そうな、面白そうな学問だと思いましたが、一方で、「これだけ研究テーマが多岐にわたるのなら、国際学部以外の学部でも学べることも多いのでは？」とも思いました。興味は持てたけれど、自分のやりたいことが絞りきれない状態でした。

穂積 2人はオープンキャンパスで学問を軸に大学像をつかもうとした

けれど、体験的な活動の場が限られていたり、1日だけの開催だったりと、学問を深く知りたいという期待に対してはやや物足りないと感じた生徒もいました。学問を考える場としては、オープンキャンパスだけでは限界があると感じ、2人の卒業後に立ち上げたのが「アカデミックインターンシップ」です。大学のゼミや実験など、日常的な研究活動を複数日掛けて体験し、大学の学びの意義を明確にしようというものです。

作間　工学系の学会に同行させてもらった生徒が「発表が全部英語だった！」とショックを受けて帰ってきたり、家畜の世話がいかに大変かを痛感して驚いたり……オープンキャンパス以上に大学の日常を実感できる活動になっていると思います。

穂積　「大学教授に、高校の勉強は大学の研究の土台だと教えられました」と生徒が報告に来ることもよくあります。生徒が大学でそのような話を聞くと、私たちも「入試のために」などと、目先の損得で授業の価値を語ることが出来なくなり、授業の質も変わってきます。こうした経験を経て、2年次の最後に取り組むのが、君たちも書いた志望理由書（**図1**）です。1年生からの活動を振り返り、何度も担任の添削を受けながら、3か月ほど掛けて志望を固めていきます。その時に私たちが心掛けていることは「それでいいの？」と問うことです。進路にはいろいろな道があるのだから、その多様な選択肢を生徒に示し、対話する中で生徒が主体的に考えを整理していくように導いているのです。

未来ではなく過去を問い そこから未来を考えさせる

吉田　2年生の時は穂積先生が担任でしたが、普段から先生といろいろな話をしましたよね。当時は「学習の記録」（**図2**）を毎日提出していたのですが、それを基に「英語が好きなんだな」と声を掛けてもらったこともありましたし、冗談っぽく「お前ら、そんなだと将来ろくな大人にならないぞ」なんておっしゃっていたこともありましたよね。でも、意外とそんな言葉が自分を振り返るきっかけになっていました。

穂積　そんなことを言ったかな？（笑）　でも、当時から「将来何になりたいの？」という質問はしないように気を付けていました。なぜなら、想定通りの人生を歩いていく人のほうが少ないのだから、不透明な未来のことを聞くよりも、「どれくらい勉強したの？」「なぜそうしたの？」「何を思ったの？」と過去を問い掛ける方が適切だと考えたからです。何もないところから自分探しや自己分析をするのではなく、過去を振り返ることで、おのずと未来が見えてくることを君たちに期待したんです。

作間　この学校に赴任して驚いたのは、「学習の記録」を毎日、ほぼ全

図1　志望理由書と、志望理由書作成のための構想メモ

2年生ではオープンキャンパス、アカデミックインターンシップへの参加、更に大学講師を招いた学問分野別講演会「向陵セミナー」などを経て、3学期に志望理由書を書く。事前に、志望のきっかけや社会的な意義などを一問一答形式で問う構想メモに取り組み、加えて志望理由書でも何度も担任のチェックを受ける。担任との対話を通して自分の志望を明確化する作業が3か月ほど続く
＊学校資料をそのまま掲載。ベネッセ教育総合研究所ウェブサイトにデータを掲載しています　http://berd.benesse.jp → HOME ＞教育情報＞高校向け

員から回収し、どの生徒が毎日どれくらい勉強しているか、教師が細かく把握していたことです。面談や「学習の記録」で、生徒の変わりつつある瞬間をつかみ、「君は変わろうとしているんだね」と認めてあげようと皆が心掛けていました。

穂積　私は、生徒が変わろうとしていることをキャッチし、後押しすることもキャリア教育だと考えています。その意味では、キャリア教育の成果は5年先、10年先を待たなくても、目の前の生徒から分かるものかもしれません。だからこそ私たち教師が、キャリア教育の取り組み一つひとつをつなげ、生徒と共に進路・学習・生活の3つの観点で変容を振り返るポートフォリオの更なる整備が必要だと考えています。

自分の好きなことが社会にどう役立つかが分かって、勉強への意欲が高まりました

東北大4年　鈴木 萌

自分に必要な力を見抜き行動できる意欲を持てた

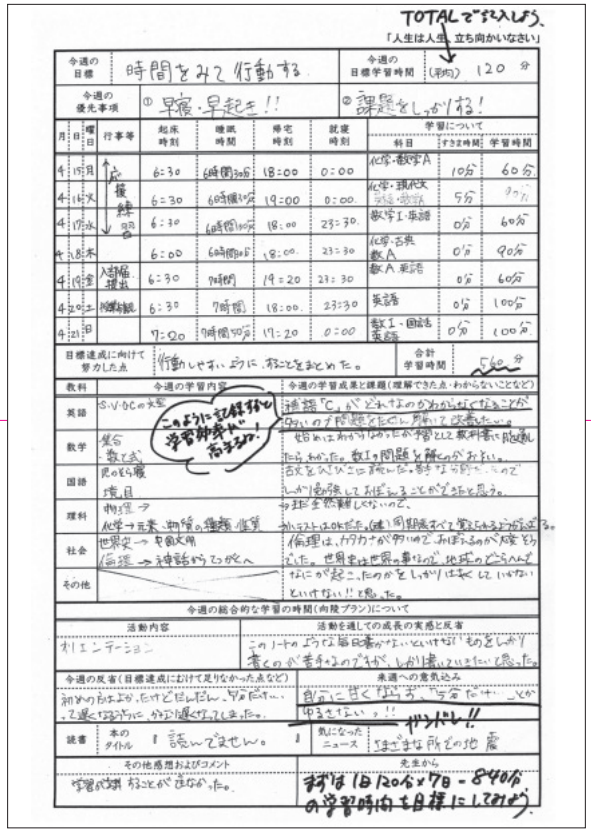
吉田　僕が進路について真剣に考え始めたのは、野球部を引退した3年生の夏からでした。国際関係学には興味があったけれど、本当にそれでよいのか、モヤモヤした気持ちでした。最終的に志望校が決まる12月まで、勉強のこと以上に進路のことで焦っていました。だから、僕は向陵プランに沿って、順調に進路決定した生徒ではなかったんです。でも、部活動を引退して、受験大も決まっていないうちに、自分の将来につながる力を付けたいと思って、受験勉強の合間に、新聞記事を要約し、意見文を書くことを続けたんです。僕は自分の考えを論理的に説明するのが苦手だったのですが、そうした力は、大学入学後も必要だと思ったからです。「学習の記録」にも書かなかったので、担任だった作間先生も知らないはずですが、個別試験が終わるまで毎日続けたんです。目先のことを考えたら、センター試験対策に集中すべきだったのだろうけど。

作間　それは今日初めて知りました。でも、吉田くんは自分で決めたことはしっかり取り組める人だったから、納得できる気がしますよ。

穂積　大学には現役で合格するのに越したことはないけれど、それは最優先事項ではないと思います。むしろどういう状態で入学するかが大切で、吉田くんはその準備が出来ていたんだろうね。もちろん、その時間を対策に当てればもっと楽に合格できたかもしれないけれど、自分に必要な勉強を自分で見付けてやり続けた精神的な成長は、入試が終わってからも役に立つものだと思います。

鈴木　向陵プランは受験のための活

図2　学習の記録



学習時間を記録するだけでなく、日々の気付きを書く欄を設けるなど、生徒の変化を発見しやすいように改良が重ねられている
＊学校資料をそのまま掲載

動ではなく、「どういう人間になって社会に貢献したいかを考えるためのもの」と先生方は当時からおっしゃっていました。吉田くんが、将来の自分に何が必要かを考え、努力したのなら、それは先生方の教えの通りだと思うし、自分が知らないところでそんな努力をしていた同級生がいたことに私は感動しています。

高大の7年間を掛けて身に付けるべき力がある

――3年次では、「自分とつながる」をテーマに、それまでの活動を踏まえて課題研究に取り組む「サクセスタイム」が行われる。鈴木さん、吉田さんがいた当時は1、2年次の活動の焼き直しにとどまった面もあったが、近年はディベート活動など生徒同士が触発し合う場面を多く取り入れ、大きく変化しているという。

考える力が身に付いたことで自分の生き方を長い視点で描けるようになりました

宮城大4年　吉田千里

穂積　表現力やコミュニケーション力は、大学や社会で必要な力です。受験勉強に時間を割くべき時期に、そうした力の育成に高校がどこまで取り組むべきかという議論が現実にあることは理解しています。しかし、大学に全てを任せ、キャリア教育を先送りすることには私たちは反対です。将来の生き方について考え、表現力やコミュニケーション力を高めることは、高校3年間だけでも大学4年間だけでも足りません。高大の7年間で培うものだと思います。キャリア教育は、高校教師が果たすべき責務の1つです。

――キャリア教育の成果は、高校生活の細部に確かな変化として表れる。だが、それ以上に、生きていく中で直面するさまざまな予期せぬ出来事に向き合った時に見えてくると、穂積先生と作間先生は考える。

吉田　自分が向陵プランで身に付けたものは、「考える力」だと思います。就職活動でこれから自分が進むべき道を考えた時、高校時代からの経験や大学での国際交流ボランティアを振り返り、「自分の夢は、日本と海外の懸け橋になることだ」と明確に思いました。夢を実現する方法はいくつかあると思いますが、その一歩としてベトナムで事業展開する旅行会社に就職しようと思っています。

鈴木　私は、大学院に進学し、麹菌をモデルとした遺伝子工学を学んで、食品や製薬の分野で社会貢献したいと思っています。好きだった生物をどのように人生につなげていけるのか、自分で調べて考えた高校時代の経験があったから、意欲を持続させてこれたのだと思います。

穂積　私たちは君たちに「職業は夢ではない。どう社会貢献するかが夢だ」と繰り返し伝えてきました。吉田くんは、日本と海外の懸け橋という夢は譲ってはいけないけれど、選べるアプローチは今後も1つではないよね。夢を実現するために自分に正直に、柔軟に現実と向き合った吉田くん、一つひとつの気付きを受け流さず、主体的な行動につなげた鈴木さんの話を聞いて、2人が私たちの取り組みの成果を体現していると実感しました。2人には、社会がこれからどう変化しても、ぶれることのない軸が出来たのだと思います。

編集部の気付き

キャリア教育において穂積先生が重視したのが、教師間での理念の共有だ。向陵プランの意図をシラバスで明文化し、時にクラスを解体し、学年一体の活動だという雰囲気を醸成するなどの配慮が形骸化を防ぐのだろう。「生徒の変容を目にすると、教師自身も変わる」という穂積先生の言葉は、キャリア教育における教師の役割を考えさせるものだ。